

房総の石製模造品製作

—白玉の製作について—

小 林 清 隆

目 次

1. はじめに	247
2. 県内の石製模造品製作について	248
3. 各地域の白玉製作	251
4. 白玉づくりの展開	256
5. おわりに	261

1. はじめに

古墳時代の主に中期から後期にかけて、古墳や祭祀遺跡、そして集落を構成する竪穴住居から、各種の農・工・器具や玉、剣、鏡を模したとされる「石製模造品」、または「滑石模造品」と称される石製品が出土する。一般に「石なし県」といわれている本県でも、多くの出土例が報じられているのは周知のことであるし、これら石製品を生産していた場所である製作遺跡や、工房といっている竪穴住居の発見例は日ごとに増してきている。したがって石製模造品をめぐる研究は一段と活発になってはいるが、資料の蓄積は細部の再検討を余儀なくする状況をも生んでいる。

石製模造品を研究対象として取り上げる場合、とくに成品については、古墳時代の社会、すなわち中央政権の動向と関連づける一つの材料として扱われるほか、遺跡や遺構の性格づけに有効となる遺物としてつかわれている。無論その過程では全国的な集成作業や、土器やそのほかの遺物との共伴関係、あるいは型式学的方法によって石製模造品自体の編年も追究されている。一方、成品になっていない非完成品である未成品は、その存在が石製模造品製作遺跡である可能性を高め、個々は製作技法を復元するためのうってつけの素材となっている。以上のような状況に鑑みると、石製模造品への対処の方法は大きく分けて、「成品を取り巻く研究」と「製作遺跡出土の主に未成品を対象にすえた研究」の二つの方向があると理解してよいであろう。ここで私が関わろうとするのは後者の領域で、さらにその一部のみにもふれることになる。

ところで石製模造品については、すでに玉類全般を含めた寺村光晴氏の幾多の優れた研究があり、全国的な視座から、県内の玉作諸遺跡についても総合的に論じられている¹。さらには寺村氏、谷川章雄氏らが中心になってすすめた『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』(以下分布調査報告)では、遺跡の分布の集成が実施されるなど、多大な成果があがっている。そして当千葉県文化財センターでは、平成4年に「房総における生産遺跡の研究」という主題のもと、玉を取り上げた『研究紀要13』(以下紀要)³をまとめた。この紀要では遺跡の集成と共に、各論では模造品製作遺跡のうち、下総地域に所在する2か所の遺跡を俎上にのせ、工房の概要と製作種ごとの製作工程を模索した⁽¹⁾。

私も紀要作成の仕事に加わる機会を得、2か所のうちの一つの遺跡に取り組んだ経緯がある。その際に種類ごとの製作上の特徴にもふれることになったが、白玉製作についてのみ、もう一つの遺跡と対比するという程度に終わり、ほかに発見されている遺跡について言及するまでに至らなかった。だから、もう少し県内のほかの遺跡についても検討してみたいのである。そこで、はじめにこれまでの成果、主に集成であるがそれを挙げて、次に今回取り上げる問題点を抽出し、その後に対象とする遺物である白玉について、具体的に検討していきたいと思う。

2. 県内の石製模造品製作について

(1) 遺跡の分布

石製模造品をつくっていた形跡は、発掘によって原石、未成品、成品、それに工具などが出土することによって明らかになる。それが堅穴住居であれば工房として確実な生産遺跡として位置づけられるし、遺構が発見できなかった場合でも、遺物から工房存在の可能性が高まり、表採であっても未成品が多く含まれていれば、製作遺跡として認識される。

昭和61年(1986)発行の「分布調査報告」では、石製模造品製作遺跡は、表採によって存在が予想される遺跡も含み41遺跡が確認されている。その際、分布状況から次ぎにあげるような、遺跡が集中する地域を8地域に設定できることを述べている。

- I. 海老川流域から手賀沼に至る地域
- II. 花見川流域及び都川流域
- III. 鹿島川流域及び手繰川流域⁽²⁾
- IV. 印旛沼北東岸から根木名川流域、長沼を経て利根川南岸に至る地域
- V. 利根川下流南岸の地域
- VI. 栗山川流域
- VII. 九十九里浜南部の地域
- VIII. 小櫃川流域及び小糸川流域

その後紀要作成時点では71遺跡、すなわち昭和61年当時から30遺跡の追加を行い得たことになった。この間の遺跡の増加は著しい感があるが、紀要中においても基本的に分布調査報告で想定した8か所の分布地域を支持した。その八つの地域に所在する遺跡は表1に示したとおりである。このなかで遺跡の名称のまえに○印のついている遺跡は紀要で追加できたところで、無印の遺跡が分布調査報告ですでにとらえられていた遺跡である。その後、今日までに新たに調査された遺跡や、周知の遺跡の別地点の調査の実施に伴い発掘された工房があることも承知しているが、報告書が未刊行のため詳細がつかめず、ここでさらなる追加は行っていない。

そこで注意しておきたいのは、八つの地域が将来的にも妥当性を有しているか、ということである。別のいいかたをすれば、「変更や地域の見直しが必要になる」ということである。もちろん大局的に現在設定している地域がなくなるというのではないが、地域設定の拡大あるいは統合の要素がすでにみられるのである。たとえば、現在の江戸川の下流域左岸に分布する野田市の尾崎梨ノ木遺跡⁴、松戸市の殿平賀向山遺跡⁵、市川市の杉ノ木台遺跡⁶などは、今設定しているどの地域にも属していないともいえる。また、印旛村に所在する古山遺跡⁷、一ノ台遺跡⁸は印

表1 石製模造品製作遺跡と作製種類

地域	遺跡所在市町村	番号	遺 跡 名	製作模造品の種類
I	船橋市	1	夏見台遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		2	八栄北遺跡	白玉
		3	外原遺跡	白玉 勾玉 有孔円板
		4	小室白井先遺跡	白玉 勾玉 有孔円板
		5	柏上遺跡	剣形品 有孔円板
	印旛郡白井町	6	中西山遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		7	○神々廻宮前遺跡B地点	剣形品 有孔円板
		8	○復山宮遺跡	白玉 勾玉 有孔円板
	東葛飾郡沼南町	9	○城山遺跡	白玉 有孔円板
	野田市	10	○尾崎梨ノ木遺跡	白玉 剣形品 紡錘車
	松戸市	11	○殿平賀向山遺跡	勾玉 有孔円板
	市川市	12	○杉ノ木遺跡	白玉 有孔円板
II	千葉市	13	上ノ台遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		14	馬加城遺跡	剣形品 有孔円板
		15	大森第1遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		16	大森第2遺跡	白玉 勾玉 有孔円板
		17	東寺山戸張作遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		18	○箕輪遺跡	(滑石剥片のみ)
	八千代市	19	権現後遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		20	川崎山遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		21	○北海道遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板 チキリ
		22	○小板橋遺跡	(未成品)
III	佐倉市	23	岩富漆谷津遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		24	群田川崎東遺跡	勾玉 剣形品 有孔円板
		25	○白井田小笹台遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
四街道市	26	西向井遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板	
IV	印旛郡印旛村	27	○古山遺跡	白玉 勾玉
		28	○一ノ台遺跡	白玉 勾玉 剣形品
	印旛郡栄町	29	龍角寺ニュータウン遺跡群No.4地点	白玉
		30	前原I遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		31	○酒直遺跡第3地点	白玉
	印旛郡印西町	32	○天神台遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		33	○大竹遺跡	勾玉
	成田市	34	石塚遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		35	磯部遺跡	(詳細不明)
		36	水掛遺跡	剣形品
	下総町	37	木挽崎遺跡	(剥片)
		38	○若庄司遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		39	○治部台遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		40	○大和田坂ノ上遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		41	○稲荷峰遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
		42	房台遺跡	(詳細不明)
		43	仲道遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		44	小山遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		45	高岡遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		46	天神台遺跡	白玉
		47	東明神山遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板
48		八幡神社遺跡	白玉 勾玉 剣形品 有孔円板	
49		○大日台遺跡	白玉 有孔円板	
50		○小野女台遺跡	(未成品)	
51		○猫作・栗山遺跡	(詳細不明)	
佐原市	52	岩ヶ崎(野中台)遺跡	白玉 有孔円板	

地域	遺跡所在市町村	番号	遺跡名	製作模造品の種類
V	佐原市	53	玉造上ノ台遺跡	白玉
		54	○堀之内遺跡	白玉 勾玉
		55	○古屋敷遺跡	(詳細不明)
	香取郡小見川町	56	○増田長峰遺跡	白玉 有孔円板
	香取郡東庄町	57	前山遺跡	剣形品 有孔円板
	香取郡大栄町	58	○馬洗城址	白玉 剣形品 有孔円板
59		○奈戸五区	(詳細不明)	
VI	山武郡芝山町	60	宮門遺跡	剣形品 有孔円板
		61	上吹入遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		62	殿部田遺跡	剣形品 有孔円板
		63	○下吹入東台遺跡	白玉 勾玉 有孔円板
	香取郡多古町	64	林遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
VII	東金市	65	道庭遺跡	(詳細不明)
	八街市	66	滝台遺跡	白玉
VIII	袖ヶ浦市	67	宮ノ台遺跡	白玉 剣形品 有孔円板
		68	野田遺跡	白玉
		69	○文脇遺跡	白玉
	木更津市	70	○マミヤク遺跡	白玉
	君津市	71	新御堂荘台遺跡	(詳細不明)

〔千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書〕の67～68頁、『研究紀要13』184～185頁を基に作成

旆沼北岸に発見されている。広く見れば前者の諸遺跡はIの地域に、そして後者の遺跡はIVの地域に包括して考えて差し支えないかもしれないが、厳密にみればやはり立地する河川が違うし、地域の区割りがそれらの遺跡が所在する地域を、的確にはあらわしていない。だから今後の遺跡数の増加によっては、河川を単位とした地域を幾つか追加して設定できる可能性がある。このことは単に模造品製作工房の分布からのみ接近できる問題ではないので、将来に検討することにし、とりあえず今回は便宜的に既存の八つの地域に基づいて進行する。

(2) 製作模造品の種類

祭祀遺跡、竪穴住居あるいは古墳から出土している石製品には、白玉、勾玉、棗玉、剣形品、有孔円板、鏡、鎌、斧、刀子、チキリ、箴、人形のほか、子持ち勾玉、立花、石枕などがある。このなかで白玉、勾玉、剣形品、有孔円板以外は量的に少なくなる。表1に示したように、製作遺跡においても、白玉の生産が認められる遺跡が各地に所在し、有孔円板、剣形品、勾玉などの生産の形跡が残されている。

遺物量を掌握するには幾つかの障害があるが、製作遺跡、祭祀遺跡、竪穴住居から出土している、主な模造品の発見遺跡数を参考程度に挙げると、白玉と有孔円板は300か所以上の遺跡で出土し、剣形品は約180の遺跡で、勾玉が約70か所の遺跡で出土している。点数でみると白玉が圧倒的に多く、把握できる範囲でも11,000点以上は出土している。ほかは、製作遺跡数と同じように有孔円板、剣形品、勾玉とつづくが、数は白玉と対比すべくもない。このような傾向は、そのまま需要の程度と結びつけることができるので、白玉がもっとも数を要求された種類であるのは疑いないところである。

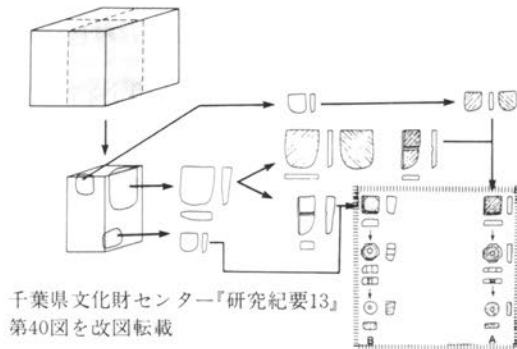
(3) 問題とする点

これまでの成果をまとめてみると、県内には70か所を超える石製模造品製作遺跡があり、それらの所在が大きく八つの地域に分かれていること、そして白玉の製作が遺跡数と遺物数で、ほかの種類を圧している、ということになる。以上のような現状に直面し、製作遺跡出土の遺物に取り組もうとすると、次に列挙するような幾つかの課題点が浮かび上がってくる。

1. 同一の種類、同一遺跡内の工房における工程・技法・形態差の有無について。
2. 同時期、同一の種類、異なる工房（遺跡）における工程・技法・形態差の有無について。
3. 石材の供給元（滑石の原産地）がどの地方に求められるのか。
4. 成品の供給先について。
5. 製作遺跡の生成、発展、衰退の状況に地域間の違いが存在するか。
6. 工房（生産遺跡）の性格についてどのように位置づけられるか。

いずれも突っ込んで考えれば、奥が深い問題ばかりである。とくに3・4に掲げた事項などは、流通とからめて、どうしても避けられない部分であるが、解明にはかなりの困難が伴うことが予想できる。6は総合的考察によってのみ導き出される課題であって、遺物から突き詰めていくのは一段と難しい。少しでも解明の糸口が存在するのは1、2、5についてであろう。

紀要では、成田市に所在する石塚遺跡と、八千代市に所在する北海道遺跡¹⁰を取り上げ、どのような製作上の手法が介在するか観察し、白玉については「白玉製作工程模式図」として製作過程の復元を試みた(第1図)。今回は、この復元モデルに基づきながら白玉製作の実態を検証してみたい。



千葉県文化財センター『研究紀要13』
第40図を改図転載

第1図 白玉製作工程模式図

3. 各地域の白玉製作

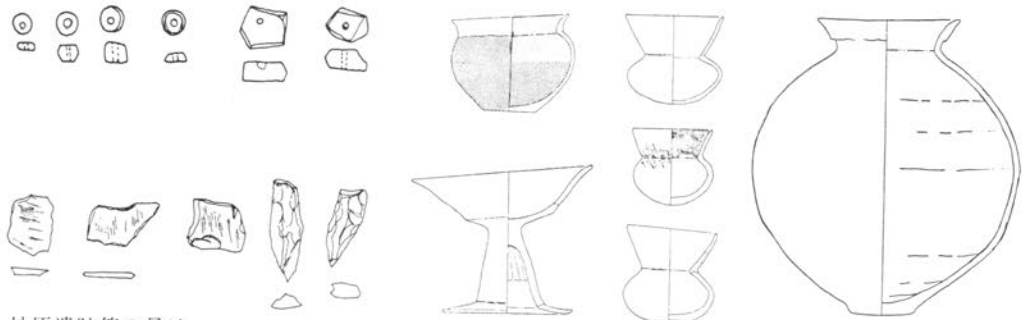
(1) 海老川流域から手賀沼に至る地域

この地域には夏見台遺跡¹¹、八栄北遺跡¹²、外原遺跡¹³、神々廻宮前遺跡B地点¹⁴、復山谷遺跡¹⁵などがある。古墳時代中期（以下中期とする）に製作を始める工房に、外原遺跡第3号址、神々廻宮前遺跡B地点013A住居跡などある。このうち时期的にもっとも早い段階から生産を開始したのが外原遺跡第3号址で、本工房をもって当地域の玉作の嚆矢とみることができる。比田井克

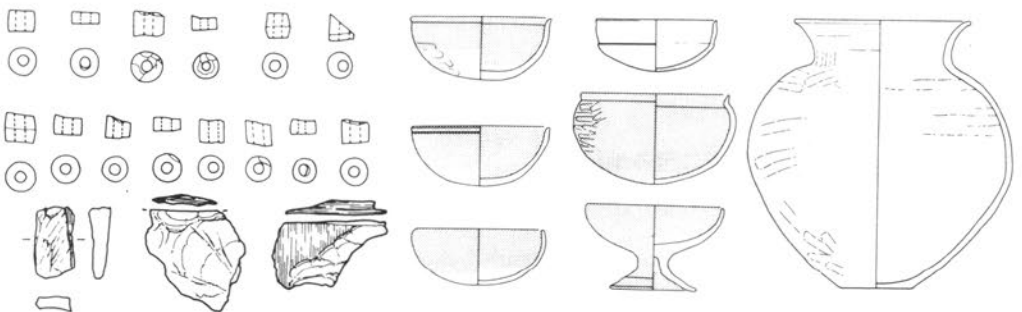
仁氏による5世紀代の土器の編年案および年代観¹⁶にしたがえば、古い部分に相当する土器が相伴しており、5世紀の前葉に溯る。そのあと中期の終末から後期初頭の工房には、復山谷遺跡120号住居址、夏見台遺跡(第2次)第7号住居址、八栄北遺跡第3住居址がある。土器からの時期差は明瞭でないが、竈の設置が認められる八栄北例がやや後出となるであろうか。そのなかから時期差を有する外原遺跡第3号址と、復山谷遺跡120号住居址の臼玉を抽出してみよう。

外原遺跡第3号址 まず成品からみていくと、上下両面が平らにつくられ断面形が長方形となるもの、中位に稜をもって六角形になるもの、張りがあつて丸くなるものが存在する。未成品には穿孔品と穿孔が途中なものがあり、「五角形あるいは平板状」を呈している。それ以前の工程で作出される剥片の数は夥しく、「多くは縦細長の板状」、「中には幅の広い剥片」があり、「横方向に鉄器による切り痕のみられるもの」も含まれる。ほかに母岩や大きめの剥片が出土している。また実測図から判断すれば、上下両面研磨の板状品が出土している。

復山谷遺跡120号住居址 成品には上下両面が平らで円筒状につくられたもので、厚いものとやや薄くなるもの、同様な形で上下両面が平らでないものが多い。また、中位に稜が生じるために断面形が六角形になるもの、これも上下両面が平らなものと同様でないものがある。全体的な傾向は、上下両面が平らでない円筒状のものが多い。穿孔途中あるいはその一段階前の工程を示す資料の呈示はないが、剥片は側面に切削痕跡を残すものも多く見受けられる。



外原遺跡第3号址



復山谷遺跡120号住居址

第2図 外原遺跡、復山谷遺跡の臼玉

(2) 花見川流域及び都川流域

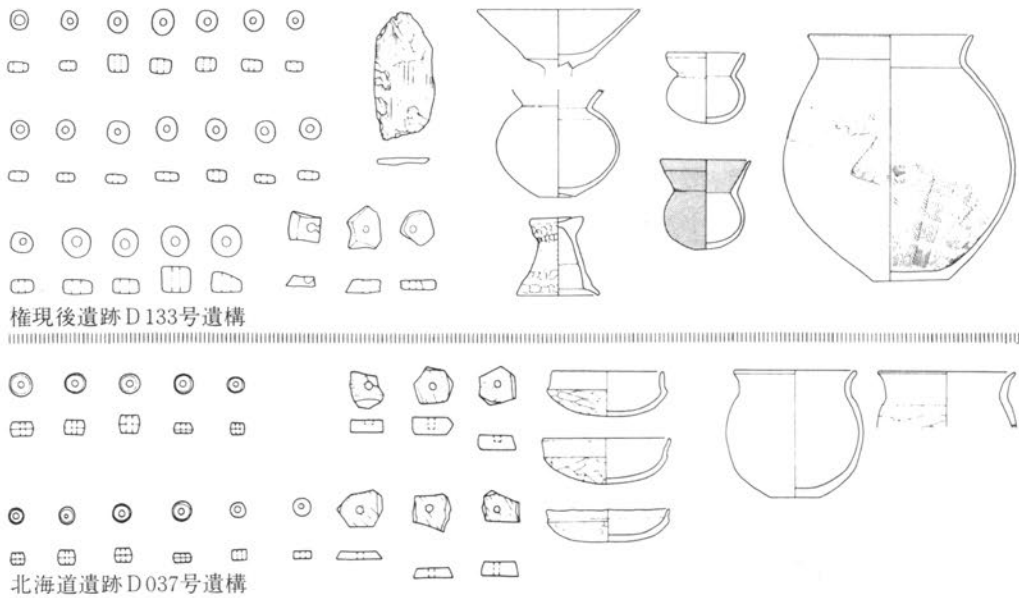
この地域には上ノ台遺跡¹⁷、東寺山戸張作遺跡¹⁸、権現後遺跡¹⁹、北海道遺跡¹⁰、川崎山遺跡²⁰などがある。中期の工房が各遺跡に展開する状況が認められ、上ノ台遺跡の第1・2・3号址の3軒、権現後遺跡の4軒の工房、北海道遺跡に12軒、川崎山遺跡に2軒など、多くの工房が存在する。そのなかでは権現後遺跡の4軒が先行し、北海道遺跡・上ノ台遺跡が後出する。川崎山遺跡は土器の量が少なく断定しがたいが、権現後遺跡に近いと考えられる。後期の工房は東寺山戸張作遺跡、北海道遺跡にある。東寺山戸張作遺跡は003・004・005号住居址が工房で、出土土器からはどの工房も後期初頭に営まれたとみてよい。この3軒にわずかな時間差を求めれば、丸底で器高が高くつくられる杯をもつ004号住居址を古く位置づけ、次に003号住居址、さらに須恵器を忠実に模倣した杯を出土している005号住居址とつづくであろう。そして現在本地域のもっとも新しい段階の工房には、北海道遺跡のD037号遺構を当てることができる。そのなかから遺物量の豊富な工房をいくつか抽出してみよう。

権現後遺跡D133遺構 成品は円筒状のもの、上下両面を平らにし中位に稜をつけるもの、中位がやや張るものが多く、中位に張りをもち上下両面が平らでないものが含まれる。未成品は上下両面に研磨が加えられずに穿孔されたもの、上下両面研磨の未穿孔のものがある。そのほか剥片が多量に出土している。

北海道遺跡D012号遺構 成品は円筒形に仕上げるものが多いが、上下の両面に研磨を施していないものが大部分を占める。量的には多くはないが、厚さの中程に稜をつけるものもある。穿孔まで進んだ未成品は、上下両面に研磨が施されず四～六角形の調整された部類が、両面研磨品を圧して出土している。報告書によれば、両面非研磨品が97.7%で研磨品が2.3%という比率になっている。

東寺山戸張作遺跡004号住居址 成品は上下両面が平らで厚さの中程に稜をもち、断面形が六角形になるものがやや目立って存在する。ほかには薄めの円筒状となるもの、断面形が台形になるものがある。穿孔まで進んでいるか、その途中である未成品は上下両面に研磨が施されたものが多く示されている。未穿孔の板状品も両面に研磨が行われていて、分割のための切削溝がとっている資料もある。なお、穿孔あるいはその前の段階まで進んだ未成品は、周辺が四～八角形になっていて、それ以上多角形には調整していない。

北海道遺跡D037遺構 成品は上下両面が研磨され、厚さの中位に稜をつけ断面形が六角形になる形態と、円筒状に仕上げられたものがあり前者が多い。穿孔が済んだ未成品をみると、上下両面に研磨が施されて平らになっているものが、平らでないものを圧倒的に上まわり、その形は四角形・六角形に調整されている。ちなみに報告書では、両面研磨の未成品と研磨を施さない未成品の比率は、86.2%と13.8%になると記されている。



第3図 権現後遺跡、北海道遺跡の白玉

(3) 鹿島川流域及び手繰川流域

この地域には岩富漆谷津遺跡²¹、臼井小笹台遺跡²²、西向井遺跡²³などが知られている。岩富漆谷津遺跡には工房と考えられる遺構が中期に6軒、後期に5軒の計11軒がある。中期は中ごろから開始され、後期はその前半までつづく。臼井田小笹台遺跡は中期前半、西向井遺跡は中期後半になるが、この2遺跡の規模は小さい。

岩富漆谷津遺跡043住 成品は上下両面が平らで中位に張りをつけるものと、張りは認められるが上下面が平坦になっていないものがある。穿孔段階あるいはその直前の未成品には、上下両面が研磨されたものと、そうではないものがある。剥片はやや長細い形態に取られているものが目につく。

西向井遺跡2号住居址 遺物総量が呈示されていないので詳細については明らかでない。成品は載っていない。未成品は穿孔まで進んだものがある。それらは全部上下面が磨かれてはおらず、多くは周辺が六角形に調整されている。

(4) 印旛沼北東岸から根木名川流域、長沼を経て利根川南岸に至る地域

この地域にもっとも遺跡が濃密に分布する。特に下総町に15か所もの遺跡の所在が確認されているのは特筆される(表1参照)。また本地域に、管玉を主体にした前期の玉作遺跡が発達していたという、地域性も注意しておく必要がある。それぞれの時期については示さないが、石塚遺跡⁹に代表されるよう中期前半に盛行の様子がうかがわれ、後期初頭に衰退する。

石塚遺跡 研究紀要で個別に取り上げたので、詳細はそれと報告書に譲る。この遺跡からは工

房が9軒発見され、上述したように時期はいずれも中期前半と考えられる。この大きな特徴は、穿孔まで済んだ未成品や、それ以前の未成品が両面研磨のものでほぼ占められていることと、両面研磨の板状品が多出している点である。

大和田坂ノ上遺跡住居址No. 1²⁴ 出土土器に基づけば中期前半の工房に位置づけられる。成品は上下面が研磨されて平になる部類では、形態が円筒形になるものと、張りがあつて丸みがつくものがある。また上下面が平でないものにも同じような形態が存在する。未成品は112点と比較的多く出土している。穿孔まで行われた未成品は、上下面に研磨が施されたものが圧倒的に多い。また、穿孔途中で欠損したと思われるものがあり、これらも両面に研磨が認められる。小さな板状を呈した穿孔前の未成品も、すでに両面が研磨済みである。

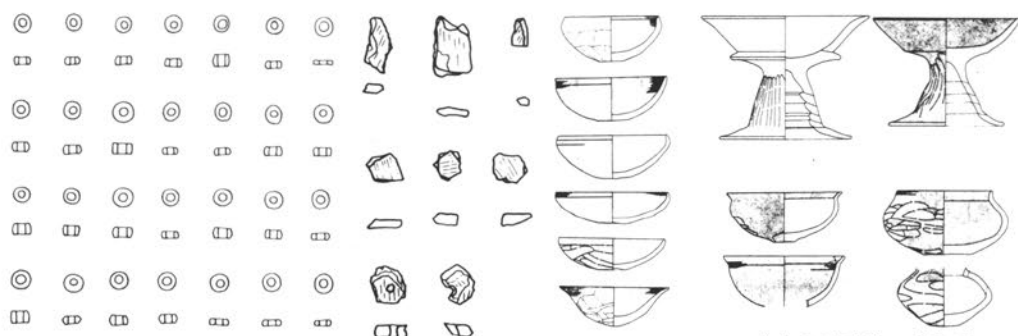
(5) 利根川下流南岸の地域

この地域には玉造上ノ台遺跡²⁵、堀之内遺跡²⁶、増田長峰遺跡²⁷、馬洗城址²⁸などが所在する。遺物を豊富に出土している工房が少ない。馬洗城址の工房の時期が中期前半に属し、玉造上ノ台遺跡、堀之内遺跡、増田長峰遺跡が後期に入ると考えられる。この後期の遺跡のなかでは、増田長峰遺跡で発見された工房が新しい段階となる。いずれも量が貧弱であるためここでは呈示しないが、馬洗城址第10号住居址から出土している未成品は上下面に研磨が施されていない。

(6) 栗山川流域

宮門遺跡²⁹、上吹入遺跡³⁰、下吹入遺跡群東台遺跡³¹などが所在する。この地域の工房はいずれも中期の期間内に収束する。

上吹入遺跡第1号住居跡 中期前半の工房である。出土遺物は豊富で、8,000点以上の滑石品が検出されている。成品のほとんどが上下面に研磨が施され、平らになるもので占められる。厚みがなく偏平なものが目立ち、円筒形や中位に稜をつける部類が多く存在する。また中位が直線的でなく、張ったように丸みをもつものも多い。穿孔完了の未成品、多角形に調整された未成品、板状の未成品、その大部分が上下両面に研磨が施される。剥片は大型は少なく、せいぜ



上吹入遺跡第1号住居址

第4図 上吹入遺跡の白玉

い4分割できる程度のものである。

下吹入遺跡群東台遺跡3号住居址 中期末葉の工房で、成品と少量の未成品が出土している。成品はすべて上下面が無研磨であり、円筒形の形態や、中位に稜を設けたり張ったりするもの、台形状の断面を呈するものが認められる。未成品も上下面が研磨されていない。

(7) 九十九里南部の地域

この地域には道庭遺跡と滝台遺跡の2遺跡が知られているにすぎない。どちらも報告が行われていないので、詳細把握が困難な地域となっている。ただ道庭遺跡については、千葉県文化財センターが行った調査³²で工房を検出しているので、この件は近く明らかになるであろう。

(8) 小櫃川流域及び小川流域

この地域には宮ノ台遺跡³³、文脇遺跡³⁴、マミヤク遺跡³⁵などが知られている。時期的には中期後半から末にかけて営まれたとみられる。このなかで近年調査が実施され、報告書がでているマミヤク遺跡についてとりあげてみよう。

マミヤク遺跡66号住居址 マミヤク遺跡で唯一発見された工房である。ここからは成品は出土していないが、同遺跡内の祭祀場から多数の成品がみつかり、その製作が行われた可能性は高い。未成品は穿孔まで進行したものがあり、それらはすべて上下に研磨が施されていない。また穿孔前の未成品も、研磨を認めることができない。ちなみに1号祭祀遺構から出土している成品は、上下面が研磨されていない、円筒形のものに限られている。

4. 白玉づくりの展開

(1) 製作

前節で地域ごとに工房における白玉製作を概観してきたので、これからは製作工程の検討を行っていきたい。方法としては、成品から工程を溯って、それぞれの段階で問題となる諸点について検証するというので、白玉づくりの実態を探ることとする。

完成品

石製模造品製作は、古墳時代中期初頭から後期前葉にわたり行われ、白玉はその期間連綿とつくられていた種類である。このことは取り上げた各地域の工房からだけでも十分理解できるであろう。そしてこの間につくられた成品には、いくつかの形態が存在することもすぐに気がつく。そこで、まず白玉の分類案を示しておくことにしよう。

分類の基準を断面形態の違いに置くと、大きく4形態に分けることができる。形態1：断面形が長方形を呈し、全体として円筒形になるもの。形態2：断面形が台形を呈するもの。形態3：断面形が六角形を呈し、全体として算盤玉形になるもの。形態4：側面形が弧を描くもの。

さらに上下面に着目して、A：上下両面が研磨され平らになっているもの。B：上下両面が研磨されず平らになっていないもの、に分けられる。これをAタイプ、Bタイプということにしよう⁽³⁾。また追加要素をあげれば、厚くつくられたものと薄くつくられたものがある。したがってA1・A2・A3・A4、B1・B2・B3・B4の8形態に、それぞれに厚いものと、薄いものが存在する。ただ厚さについては、明確な数値的基準を設定しないと曖昧さが残り、そのままでは普遍性をもたえない。

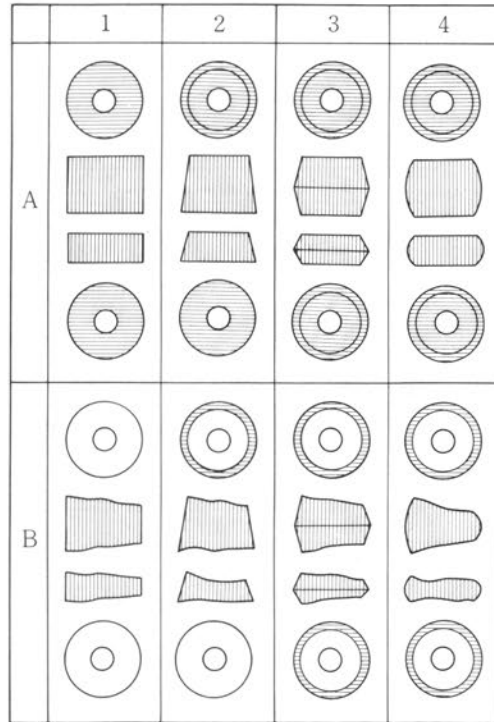
ではここに提示した形態差はどこから生じてくるのであろうか。たとえばA3などは形をつくるという意味で、大変丁寧な作業の所産であることは一目瞭然で、それに対してB2などは手抜きが甚だしいのではないかと思

える。総体でみればAグループが丁寧でBグループが雑ともいえる。このような違いが時間差、あるいは地域性として出現するのか、表2をみてみよう。

この表に示した中期の遺跡と後期遺跡の数に大きな開きがあるのは、白玉の盛行が中期の期間内にあったことを意味するものであるが、各タイプと形態は時期や地域に関わらずつくられている。このような在り方から考えると、AタイプとBタイプという製作上の違いと、1～4の形態の違いは、時間差あるいは工房の特徴を表す指標とはなり得ないと結論づけることができる。丁寧な形態に仕上げられたものから、手を抜いた雑な仕上がりの成品へと推移したという単純な図式は、白玉については成り立たない。そこで必要とした形態が当初から在り、それに向けて幾つかの作業方法が、石製模造品製作が始まった時点で用意されていた、と推測したい。必要とする形態、曖昧ないかたをすれば、必然的にそうになってしまう形態が1～4ということになる。それは仕上げの研磨からうまれるのである。

仕上げ研磨

上述の推測にしたがえば、形態差は仕上げのための側面研磨の違いによって生ずるわけである。形態1は一方方向の研磨を行うことでできあがり、形態2は形態1と同じような動作で、力の加減が偏ったことによってできたと考えられる。形態2は形態1にすることを指して仕



第5図 白玉の分類

表2 白玉の形態別出土状況

時期	地域	番号	遺跡・遺構名	A				B				
				I	II	III	IV	I	II	III	IV	
中期	I	3	外原遺跡第3号址	○		○	○					
	II	19	権現後遺跡D132号遺構				○					○
	II	19	権現後遺跡D133号遺構	○		○	◎					○
	II	21	北海道遺跡D010号遺構					○				
	II	21	北海道遺跡D012号遺構	○				◎		○		
	III	23	岩富漆谷津遺跡043住	○			○					
	IV	34	石塚遺跡042号址	○	○	○						
	IV	34	石塚遺跡049A号址	○	○	○	○					
	IV	34	石塚遺跡050号址	○	○							
	IV	40	大和田坂ノ上遺跡住居址No. 1	○			○	○				○
	VI	61	上吹入遺跡第1号住居址	◎		○	○					
	VI	63	下吹入遺跡群東台遺跡3号住居址					○	○	○	○	
	後期	VIII	70	マミヤク遺跡66号住居址					◎			
I		8	復山谷遺跡120号住居址	○		○		◎		○		
II		21	北海道遺跡D037号遺構					○		◎		
II		13	上ノ台遺跡第2号址					○				
II		17	東寺山戸張作遺跡003号住居址					○	○			
II		17	東寺山戸張作遺跡004号住居址	○	○	◎						

注：番号は表1の番号に対応。○は出土が認められるもの。◎は目立って出土しているもの。

上げにかかったが、意に反し結果として失敗し、形を崩した失敗品との見方もできる。形態3の研磨は、方向は前2者と同様と考えられるが、角度を変えて行っている。具体的にはそれを復元しえないが、幾つかを連ねて、交互に研磨角度を変化させ、稜を作出するように仕上げたものと思われる。形態4は角度を変えつつも、丸みをもつように研磨を施したと想像される。これも形態2と同様に、本来は形態3にするはずだったものが失敗したのかもしれない。ほとんどがこの段階以前に穿孔が完了している。

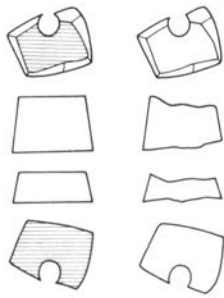
穿孔

穿孔は側面研磨の前に実施されているのは確実である。しかし工具の材質さらに方法となると、必ずしも解明されてはいない。穿孔工具としては鉄製の錐が有力であるが、竹やほかの木質でも錐となりえるので、実際に発掘で実証するしかないであろう。これはものが出てくれさえすれば、自ずと解決の方向へ向かうということになる。難しいのは穿孔に伴う、工人の動作を含めた方法である。錐の材質は一先ず先送りにしてこの点について若干推測をしてみよう。

最初に幾つか考えられる方法を挙げると、①：側面調整が済んだ未成品1点ずつに穿孔を施す。②：数個をまとめて穿孔する。③：①・②以外の方法、ということになる。①の方法は非効率な作業方法であるが、もっとも確実であり、実際にとられていたと思う。希にある両側穿孔の成品がそれを裏づけている。②の方法は、a：数個を横に並べ、それに対応する錐を

設定し、一回の動作でまとめて穿孔する、b：数個の側面調整未成品を縦に重ね穿孔する、という二通りの方法が浮かんでくる。aの方法は飯島治通氏の多量穿孔機からヒントを得たものである⁽⁴⁾。

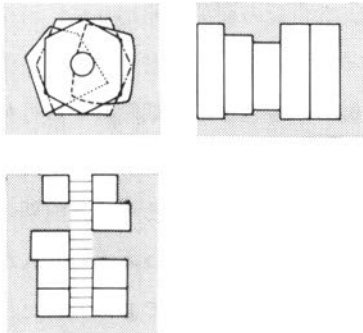
ところで穿孔が完了し、側面研磨が行われずじまいの未成品も工房から出土しているが、このなかには穿孔の途中で欠損していった失敗品が多く存在する。ほかに穿孔の途中で欠損し



第6図 穿孔失敗の例

たとも見られないのに、穿孔しても使えないというものもある。たとえば第6図に示したような、中心をずれて穿孔がなされたものである。こうなってしまったら、まったくの無駄骨なのに、なぜ穿孔作業を続行し貫通させたのだろう。1点ずつ行っていたら、まさか中心をずらしたまま最後までいってしまうことはないと思う。途中でずれてしまって、それを修復する機会を得ずして穿孔を続行したと考えられるのである。このような矛盾をつくりだす可能性の一つとして、bの方法が浮上した。

bの方法をAタイプの未成品をモデルに説明しておこう(第7図)。仮にここではAタイプの未成品を5点重ねている。ものが小さいので粘土などでこの5点を固定する。粘土は網をかけた部分である。この時に形や大きさが同じであれば問題はないが、そうではないので、必ずしも個々の中心が5点を貫くようになるとは限らず、出たり入ったりする。したがって、そのような状況で穿孔すると、上から2番目・3番目のように、穴が端によって切れる事態になってしまう。効率的生産方法からつくりだされたものが、孔を穿ったにもかかわらず、結局は「使えない未成品」だったということになるのだろう。



第7図 複数穿孔b 想定図

た部分である。この時に形や大きさが同じであれば問題はないが、そうではないので、必ずしも個々の中心が5点を貫くようになるとは限らず、出たり入ったりする。したがって、そのような状況で穿孔すると、上から2番目・3番目のように、穴が端によって切れる事態になってしまう。効率的生産方法からつくりだされたものが、孔を穿ったにもかかわらず、結局は「使えない未成品」だったということになるのだろう。

形割未成品第2段階（側面調整）

これは穿孔後の側面研磨を効率よく行うための作業工程と位置づけられる。穿孔後仕上げの研磨を施し、円形に近づける作業の準備がここで設けられているのである。具体的には平面形を六角形や八角形の多角形にする作業を指す。工具に何を用いていたかは特定できないが、多角形化は、切削や折断で行ったと推測される。

形割未成品第1段階（基本形の作製）

寺村光晴氏の白玉製作で、「白玉の基本形すなわち白玉未成品」といっているものである。AタイプとBタイプはこの段階以前で決定されていることになるが、出土品から確実に検証できるのは、四角形を基調とする形割未成品までである⁽⁵⁾。ここにおいて、もっとも顕著に製作手法

上の特徴が看取できるので、Aタイプを「研磨形割未成品作製タイプ」、Bタイプを「無研磨形割未成品作製タイプ」といいかえることもできよう。

形割未成品の獲得

これまでの工程を、第1図にしたがって示すならば、図の右下の枠で囲った部分ということになる。白玉の未成品と呼ばれるのは、枠内の成品以外のものである。形割未成品の素材をどのように取るかは、この枠外になる。Aタイプは両面研磨を施した板状品の分割か、小剥片に両面研磨した単体品のどちらから獲得し、Bタイプは未研磨の薄い板状の剥片の分割、薄く剥がした小剥片を材料にしたと想定できる。分割の方法としては、刀子などの金属製工具による切裁か、切削して折断したのであろう。以上の素材自体は母岩から直接取ったとも考えられるし、大きめの剥片から取ったとも推測される。Aタイプの素材の取り方もBタイプと同じであるが、母岩からの剥片の取得は、工具を用いて剥離したり、刀子などで切り取ったと推定される。いずれにせよそのような剥片と母岩の接合例を見ていないので、状況からの可能性の高い推測にとどまざるを得ない。さらには問題点にあげたように、石材の供給経路、産出地と未解決の部分がこの先に多々控えている。

(2) まとめ

これまで述べたように、石製模造品のうち白玉については、5世紀の前葉に開始され、当初からここでAタイプとした「研磨形割未成品作製」と、Bタイプとした「無研磨形割未成品作製」が併存していたことが明らかになった。この2タイプが製作手法として初期段階から行われていたのは、前期の管玉製作による玉作手法のなかで育まれた技術的蓄積から生まれたか、すでに完成した手法として、ほかからこの地に技術移入されたかであろう。おそらく、前期の玉作が盛んであったという歴史のおよび地理的環境から、容易に模造品製作の技術も取り入れることができ、石無しの房総の各所に工房が営まれたと考えることもできるのである。また、形に関しては、四つの基本形態が初めからほぼ出揃っていたことを確認することができた。したがって、白玉については技法や形態によって、年代的序列を与える作業が困難ということになってしまった。しかし、逆の見方をすれば、AタイプとBタイプの二つの製作手法の併存継続こそが房総の白玉作製を特徴づけることになる。遺跡や工房ごとによってAタイプを選択したり、あるいはBタイプが多かったりする現象は、地域性や時間差であられるのではなく、遺跡なり工房の担っていた役割、たとえば祭祀用に供給するとか副葬品として使うというような供給先の違いや、必要とする数量への対処などの、その時の工人のおかれていた環境によって選択されたと推測される。今後使用場所での出土品を分析していく必要がある。

5. おわりに

これまで石製模造品を対象にした、様々な検討が行われてきている。しかし「古墳出土品と祭祀・生産・集落遺跡出土品との体系的な研究と言う意味では、まだ多くの課題を残している³⁶」という指摘が、実際に照らせば現状をよくとらえている、といわざるをえない。そのようななかで、「体系的な研究」の末端になればと思い、房総のみに限定した、しかもまったくといっていいほど些細な点を問題に据えたのである。これからに向けての小さな第一歩としたい。

おわりになってしまったが、加藤正信氏、山口典子氏との共同作業で行った紀要作成の過程で、両氏からさまざまな貴重な助言をいただき、多くの視点を得ることができた。資料の実見に際しては、千葉県立房総風土記の丘資料館、芝山町立芝山古墳・はにわ博物館、阪田正一、岡田誠造、西口徹、倉内郁子、福間元の機関・諸氏にお世話になった。また現在の職場では田村隆氏から玉類の石材と産出地についてご教示をいただいている。各氏に深く感謝したい。

なお本稿は、文部省の平成5年度科学研究費補助金奨励研究B「房総における玉作の技術的特徴とその推移について」（課題番号05904040）の、研究成果の一部をまとめたものである。

註

- (1) 『研究紀要13』では、成田市に所在する公津原遺跡群中の石塚遺跡(引用・参考文献9)と、八千代市萱田地区で調査された北海道遺跡(引用・参考文献10)について取り上げた。
- (2) 『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』のなかで「II. 鹿島川流域及び手繰川流域」と記されており、『研究紀要13』でも同じくしたが、正しくは「手繰川流域」なので、ここで訂正しておきたい。
- (3) 阪田正一氏は、八千代市北海道遺跡の報告において、「白玉の成品と未成品について細部を観察すると表裏両面に研磨を施した剥片を素材としたものと、研磨を施さず剥片そのままを素材としたものと2通りの工程を看取することができる」とし、「前者をAタイプ、後者をBタイプ」と仮称し、それぞれの工房のA・Bの比率を呈示している(引用・参考文献10 383~385頁)。本稿のA・Bタイプも阪田氏にしたがったものである。
- (4) 飯島治通 「第2節 古代攻玉における多量穿孔生産の実験的研究」(引用・参考文献1 153~157頁)
- (5) 寺村光晴氏は、可能性として考えられる白玉の製作方法を幾つか挙げている。そのなかに「管玉を切断する」という方法を、指摘のあるの一つとして示している(引用・参考文献37 337頁)。『研究紀要13』でも、棒状品を分割して白玉を製作する例(219頁)を呈示したし、佐倉市岩富漆谷津の032住(引用・参考文献21 309頁)に2点の白玉の接合例が報告されている。しかし私はこのような方法はまったくの例外としてとらえるべきで、方法として確立していたとは考えていない。

引用・参考文献

1. 寺村光晴編 1973 『下総国の玉作遺跡』 千葉県教育委員会
2. 千葉県教育委員会 1986 『千葉県生産遺跡詳細分布調査報告書』 千葉県文化財保護協会
3. (財)千葉県文化財センター 1992 『研究紀要13』

4. 野田市郷土博物館 1986 『野田市文化財抄報6 埋蔵文化財調査概報Ⅲ』
5. 松戸市遺跡調査会 1987 『殿平賀向山遺跡』
6. 市川市教育委員会 1980 『昭和54年度埋蔵文化財発掘調査報告』
7. (財)印旛郡市文化財センター 1986 『印旛村村道瀬戸師戸線発掘調査報告書』
8. 平賀遺跡群発掘調査会 1986 『平賀』
9. (財)千葉県文化財センター 1981 『Loc.20』 『公津原Ⅱ』
10. (財)千葉県文化財センター 1985 『八千代市北海道遺跡』
11. 船橋市教育委員会 1976 『夏見台(第2次)』
12. 船橋市教育委員会 1974 『八栄北』
13. 船橋市教育委員会 1972 『外原』
14. (財)印旛郡市文化財センター 1988 『神々廻遺跡群』
15. (財)千葉県文化財センター 1982 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』
16. 比田井克仁 1988 『南関東五世紀土器考』『史館』第20号
17. (財)千葉県都市公社 1973 『千葉市上ノ台遺跡』
18. (財)千葉県文化財センター 1977 『千葉市東寺山戸張作遺跡』
19. (財)千葉県文化財センター 1984 『八千代市権現後遺跡』
20. 八千代市遺跡調査会 1980 『萱田町川崎山遺跡』
21. 佐倉市教育委員会 1983 『岩富漆谷津・太田宿』
22. (財)印旛郡市文化財センター 1991 『臼井田小笹台遺跡』
23. 東京電力北総線遺跡調査団 1982 『北総線』
24. 大和田坂ノ上遺跡調査会 1988 『大和田坂ノ上遺跡』
25. 佐原市教育委員会 1988 『佐原市内遺跡群発掘調査概報Ⅱ』
26. 堀之内遺跡調査団 1982 『堀之内』
27. 小見川町遺跡調査会 1984 『千葉県小見川町増田長峰遺跡発掘調査報告書』
28. 大栄町教育委員会 1989 『千葉県大栄町馬洗城址発掘調査報告書』
29. 山武考古学研究所 1974 『宮門』
30. 水資源開発公団 1979 『上吹入遺跡』 『成田用水』
31. 下吹入遺跡調査会 1987 『東台遺跡』 『下吹入遺跡群』
32. (財)千葉県文化財センター 1993 『千葉県文化財センター年報No18 -平成4年度-』
33. 梶山林継 1967 『千葉県岩井宮の台祭祀遺跡と国勝神社』 『研修』20
34. 山本哲也 1991 『西上総における古墳時代中期の玉作-文脇遺跡の例を中心として-』 『研究紀要Ⅴ』
(財)君津郡市文化財センター
35. (財)君津郡市文化財センター 1989 『小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡』
36. 寺沢知子 1990 『石製模造品の出現』 『古代』第90号 早稲田大学考古学会
37. 寺村光晴 1980 『古代玉作形成史の研究』 吉川弘文館

(財団法人山武郡市文化財センター)